

朝8時48分、教会の鐘が鳴り響いた。アメリカン航空一一便が九十二名を乗せ、世界貿易センタービル一号館北タワーに突っ込んだ時間である。あの瞬間から、一週間がたった。ホワイトハウスでも、市庁舎でも、教会でも、市民の間でも、二分間の黙祷が捧げられた。これまでに確認された死者の数は、十八日付の新聞発表によると、百九十九名。行方不明は五千四百二十二名。発見された生存者はたった五名、十二日の水曜日からはひとりの生存者も発見されていない。ニューヨークの日本総領事館によると、日本人で確認された死者は二名、行方不明は二十二名という。

「この先、多くの生存者を発見することはない、というのが現実です。しかし、まだ捜索は続けます」

ジュリアーニ市長はこう発言した。市庁舎は爆発時の灰と瓦礫にまみれていたが、昨日からもと通りに機能し、市長もここで執務を始めた。コマージュナルに二十四時間報道を続けたテレビ局も、昨日の月曜日から、コマージュナルを入れるようになった。二十万人が住むキャナル・ストリート以南も、八十パーセントの事務所や店が再開した。市内に入ろうとするクルマやトラックは警察の検問もあって長く渋滞し、ほぼ正常に戻った地下鉄も遅延運転が続いている。

街はいつもの生活を取り戻しつつある。道行く人びとは「失礼」と言いながら通り過ぎ、ぶつかりそうになれば「あら、ごめんなさい」と声をかけ合う。ドライバーは止まって歩行者に道を開け、お年寄りがゆっくり道を渡るのも微笑みながら待っている。薬局のチェーン店に行くと店員が「グッド・モーニング」と声をかけてきた。この店で挨拶などされたことのないわたしは面食らった。買い物に行くとは以前は店員に嫌な顔をされたものである。給料の安いこんな仕事なんかやりたくもない、という不満いっぱい顔つきだった。今では「何をおさがしですか」とにこやかに応対してくる。以前のニューヨークにはなかったことだ。

「まるで一カ月がたったみたいに見えるね」

ピートが新聞を読みながら呟いた。

あれから一週間、南タワーが爆発して頭上に落ちてくるあの瞬間が昨日のようにも思えるし、また、ずいぶん前のことだったようにも思える。あの時、タワーにいた五千人以上の人びとのなかに生存者はいないかと祈り、もう幕が切って落とされたテロリストとの戦争という現実には身震いし、知れば知るほど周到に用意された同時多発テロにやり場のない怒りを感じてきた。

夕方、ようやく開いたクリーニング屋さんへ出かけた帰り道、アパートへ帰ろうとチャーチ・ストリートに出て、南の方向へ目をやった。

「あら、景色が変わっている」

わたしは思わずひとりで呟いた。九月十一日朝まで高く空に伸びていた二本のタワーは、もちろん、ぽっかりなくなっている。よく晴れた快晴の空にちよつとだけ夕日が差し込み、一週間、そのあたりを覆っていた煙が初めてすっかり引いていた。その先に古いニューヨークの歴史を留める小さな建物が顔を出したのである。世界貿易センタービル南側のリバティ・ストリートに面する建物に違いはない。そして、北を振り向くと、いまではニューヨークでいちばん高いエンパイア・ステート・ビルが夕日をいっぱい浴びて輝いていた。